

8. シンポジウム：諸外国の入学試験制度

高坂 正 顕 倉石 精 一 相良 惟 一
池田 進 永井 道雄 森口 兼二*

目 次

8. 1. シンポジウムの目的と比較方法に関する一つの角度
8. 2. ドイツとイギリスの場合
8. 3. 入学競争と大学の性格
8. 4. 大学の機能と試験制度における日本の特殊性

8. 1. シンポジウムの目的と比較方法に関する一つの角度

森口：われわれが過去2年間つづけてきた研究を通じて、日本の入学競争の現況なり、それを促進している社会的条件なりについては、かなりはっきりしてきたと思うのです。そこで今日は、シンポジウムによって、世界の主だった国々の進学制度なり、入学競争の現況というものを話し合ってもらい、比較的な観点から日本の現状を一層よく理解し、考え直してゆくメドを得たいとも考える訳です。そこでまず、話を進めてゆく便宜として、各国の入試制度なり、入学競争なりには、何かそこに基本的な類型のようなものがないか、ということなのですが。

永井：僕は、そういうことを比較するための一つのシステムみたいなものを考えてみた。まず、つぎのような二つの極を考えてみる。その一つは、社会に階層秩序というものがはっきりあって、それに対応するように学校制度も、いわゆる複線型をとっている。この場合は、いい階層の出身者は指導者になるような学校のコースに入る。たとえば昔の日本では、上層の子弟は高校・大学ルート、そうでないものは実業中学校的なものへという具合で、階層秩序が複線型

の学校制度と対応しているようなところでは、一般に入学競争は余りないだろう。これが一つの極。それに対して、もう一つの極は、社会階層の移動というものが非常にあって、同時に学校制度は単線型をとり、単線型の中で絶えず自由に学区制の選択が行われて能力のあるものが伸びてゆける仕組の場合。即ち、社会も比較的単線型で、学校も単線型であるような場合で、これも割合うまくゆくだろう。そして、この二つを極に考えると、非常に図式的ですが、それから外れた状況というものが真中に、ロジカルには二つあり得る訳です。

そのひとつは社会の階層秩序の方はかっちりしていて、比較的動きがないにもかかわらず、学校の方は単線型をとって、いろいろな人間にできるだけチャンスを与えようとするような型の場合、もう一つは学校の方は複線型だが社会の方は単線型という場合ですが、これは論理上考えられるだけで実際には有りそうにもない。そこで前者の場合ですが、日本は社会の動きが余りないけれども学校制度が単線型で、それに非常に近い状態にあると思います。つまり、社会に出てからの移動が少なく、学校だけが正当に出世を争うルートであるわけですから、競争がここに集中してくる。入学競争が大変はげ

* 司会者

しくなるわけです。

倉石：日本の旧制度はどちらに入りますか。

永井：旧制度は完全な複線型とまではいかないですね。複線型と単線型の間みたいなものだと思います。

森口：ところで、いまの日本の学校制度は単線型ということになるわけですが、同じ単線型といっても、アメリカの場合と日本の場合では違うのではありませんか。いま旧制度の話も出ましたが、日本の場合は、昔の複線型の亡霊につきまとわれた単線型というか、非常に学校差の大きい単線型だと思うのですが。

永井：そうですね。しかし、同じ単線型でも学歴の値打が変わってくるという点を理解するためには、やはり社会階層秩序について申し上げたことが重要だと思うのです。もう少し具体的に説明しますと、日本では、中学を出たひとたちの社会的待遇が、余りよくないわけです。もちろん、戦前にくらべれば、現在の方が中学出や高校出の待遇はよくなっているでしょうし、寺尾琢磨さんの「教育の経済学」という本でもそのことは指摘されているが、現在でもそれほどよくないし、転職が多い。ぼくが彦根で調査したのものによると、中学を出て僅か5年間に平均2～3回も転職しており、一番ひどいのは5回もしている。大体、中小企業に勤めているのが多いわけですが、転職の機縁になるのは首切りだけでなく、会社がつぶれてしまったり、自分の方から給料が安いので止めるといったことが多い。これは全国的なデータではありませんけれども、そういう状況になると、出来れば学歴をよくしておきたいという事で、高校へ行こうとする。ところが高校を出ても、高校卒業者は非常に多くて、労働力の供給が需要を上まわり、ここでもまた、失業がおこる。就職率は60%だ。そこで大学へゆけば大丈夫だろうということで大学へ進学しようとするが、ここでも潜在失業をふくめれば、いまのところ就職率は65%程度。ただ非常にいい大学を出たひとだけが安定している。こうなると、下の方が不安定であ

ればあるほど、いい大学を出る事の既得権の値打が高い。つまり、日本の学閥がなぜ強くなるかということ、中学を出た位の人の方が生活が不安定だから、それだけ比例的に、既得権の値打が高まるということだとぼくは考えます。ところがアメリカはそうじゃない。

アメリカでも学校制度は単線型で、誰でもどんな学校にも入れるというわけです。しかし実力競争は社会に出てからも行なわれる。社会に出てからも、比較的上下の移動が楽なわけですから、そんなにいい学校を出ない場合でも、出てから引続き競争することができる。アメリカだったら、地方の大学を出たひとが、地方で会社をつくる時には、かなり有力な地位につくわけですね。例えばミシガン州だったらミシガン大学出身者が、かなり重要な地位につける。そこで大きな仕事をして、後には全米的にのしてゆくこともできる。そういう状況です。ですから、同じ単線型でも、ハーヴァード大学既得権といったものがそれほど高くもないし、日本のように既得権の高い大学と低い大学の差もないわけです。それに、やはりハイ・スクールを出た他の人間がかなり楽に暮せるという事も関係があるでしょう。しかし、ともかく、このようにして、ハーヴァード大学卒業既得権も、ミシガン大学卒業既得権も同じとは云えないまでも、近いような関係になってくるわけで、この点、森口さんの云われたように、同じ単線型でも、事情がちがって、学歴の値打が変わってくると云えるわけです。そうして、学歴の値打が変わってくるというのは、社会関係がどれだけ固定しているかということと関係がありそうだというのがぼくの意見です。

8. 2. ドイツとイギリスの場合

森口：では、永井さんの出された角度から見て、ドイツなり英国なりの場合は、どういうことになりましょうか。

高坂：いま、アメリカの事を永井君からききましたが、これは階層秩序が固定していない社会

の典型的なものです。それに対して、ドイツなんかは、階層秩序が固定している方だと云えましょう。ところが、ドイツの場合も、入学試験をめぐる問題は殆ど起らない。一例をあげましょう。これは、1953年に行なわれた、4,100家族の13,659人を対象とする調査ですが、ごく典型的に申しますと、社会の階層を仮にⅠ、Ⅱ、Ⅲに分ける。Ⅰというのは例えば高級官吏・大学教授・大商人や企業家、第Ⅱのクラスは中流の官吏・普通の教師・独立した商人、第Ⅲのクラスは農民・一般労働者等です。そうするとこれら各階層の進学状況は、つぎのようになります。(表参照) 即ち、ドイツでは大学に入っ

進路 社会階層	ギムナジウム (大学進学組)	オーベルジュ (小学校上級)	フォルクス シュ (小学校下級 どまり)
Ⅰ	56.93	29.44	1.62
Ⅱ	31.24	40.17	26.60
Ⅲ	11.83	30.39	71.78
計	100.00	100.00	100.00

てゆくものが全体の10%強なんです。その階層別構成はⅠの階層が56.93%、Ⅱが31.24%、Ⅲは僅かに11.83%です。逆に、小学校の下級で終わってしまうものの構成では、その71.78%までがⅢのクラス所属で、Ⅰのクラスは1.62%にすぎないのです。これは、ドイツの階層秩序と進学面との対応関係をはっきり示すものだと思うのです。そうして、ここでは、大学の入学競争は日本のような意味では起って来ない。

もう一つ注意を要する点は、ドイツの場合など上級学校が試験をして入学を許可するという方式ではなく、下級の学校が上級学校に進学し得る資格を与え、これを上級学校も認めるといった制度上の相違です。これが日本流の入学競争の見られないことに関係していきましょう。ともかくドイツの場合、階層秩序がかたく学校も複線型ということで、さっきの図式に妥当すると云えましょうね。

永井：始めに大胆な類型化をやりましたが、別

にこだわって頂くことはないと思います。それよりも、今、ドイツについてかなり細かい説明もありましたので、僕はイギリスの場合について知っている範囲のことを申し上げたいと思います。イギリスもドイツに比較的状況に近い訳で、階級移動が割合なく、学校の方もそれに対応して Dual System でした。ところが1941年の法律ができて、イギリスも近代的な Public School Education を強化しようということになった。ところが Public School Education を強化しようという場合に、日本はアメリカ同様単線型をとりましたが、英国は単純な単線型にせず Dual System と Unitary System との妥協のようなものを考えた。というのは、社会には分業がある。大別すれば、ある人びとは知的労働に従事するし、他の人びとは筋肉労働に従事するといった具合です。で、人を育て上げる学校の方でも、それに沿うところがなければならぬ。

そこで、どういうことをしたかという、イギリスで一番苦勞したのはミドルスクール・コースです。これはトライパートイト・システム (Tripartite System) と称するものでコースを3分した。第1は Grammer School で上の学校に進むためのもの、第2は Technical High School で技術的なコース、第3は Modern School で普通の一般中学です。ところで、このようにはっきり分けてしまうと Dual System になりますが、英国の場合は分け乍らも同時にその中での交流を絶えずつくるようにしている。また分けて入学させる場合にテストを厳重に行い、その配分には充分に注意しているわけです。テストの仕方も、知能テスト、適性テスト、学力テスト、それでもなお及ばないところは、小学校の先生に尋ねて、その意見を充分に参酌するということです。それに応じて今の三つの System のどれに入れるかを考える。そして、入ってからでも、なお移動ということ工夫するという訳です。僕の読んだ本では、この移動はうまくいっているところもあるが、

うまくいってないところもある。どこが、うまくゆかないかというところ、三つに分けると一番上等なのは Grammer School だと一般の人びとは考えているから、Technical High School の秀才が Grammer School に移る方は余り問題はないが、一旦 Grammer School に入ってしまったら、それから実は技術の方が向いているから Technical School に行きたいということになっても、うまくゆかない。だから完全に両方からの移動が行われるのではなく、一方交通的になっている。ところで中学を終った後にも、今度は又、国家の試験があって大学に行くものは行くといった具合です。だから二つの System の妥協を試みているとも云えましょう。大学に行かず職場に出る人のためには、いまの Technical High School とか Modern School があるわけです。なお英国には、日本に非常に近い総合制が別にある。Comprehensive School です。これは一つの学校の中に三つのコースを全部入れて、しかも三つに分けている。そういうやり方をとっているのは London 地区だが、これは余程金がないとできないから、全英的にはまだやってない。

とにかく、こういう風にして、Middle School Course を終って、Grammer School 出の人は大学へ行き、他の人は社会に出るわけですが、社会に出てからも大学教育のチャンスは与えておかねばならないというので、University Extension が 1941 年来強化されている。職場に実際に出たものが大学に帰って勉強するとか、あるいは夜学で勉強するとかの方法が講じられている。そのため法律的にも、大きい会社は 1 週間に 1 日無償で社員を大学にやってやらねばならないという規則があるようですが、本には、その規則が余り守られていないように書いてあった。この規則は最近だけではなく、1910 年代に一度つくられた事がある。その時も守られなかった。今では、その時よりは守られているけれども実際には完全に守られているわけではないと書いてあるのです。ところで今お

話したやり方も単線と複線の妥協という方法なわけなんです。そういう型でもって、入学競争はどこにも起っていない。非常にうまくいっているとも云える。

高坂：ドイツでは階層秩序がかなり固定している一つの証拠には、フランクフルト・アン・マインにある教育研究所では、小学校 4 年の子供について、将来どの方向に進学すればいいかという事のテストをやって、このテストでもって実際に指導すれば、どの位の効果を発揮するかということ調査研究の課題としている。これをもし日本でやってみて、小学校 4 年の子に、君は大学に行っても駄目だ、中学校で止めなさい、実業学校ですという指導をやったら父兄がおさまらないでしょう。

永井：イギリスでもそれをやっておさまらない。

高坂：そりゃドイツでも、おさまらないかもしれないが、ともかくそういうテストを一番進んでいる研究所でやれるという程度の安定性があるわけです。

ドイツの従来の制度は、永井君の云われたイギリスの場合と全く同じで、1920 年にワイマール憲法ができて教育制度が可成りかわる事になるわけですが、この憲法ができるまでの学校の組織は Isolation System (分離体系) というものをとっている。ドイツの Volksschule (小学校) といいますが、昔の日本の小学校の制度によく似たものでして、最初の 4 年が Grundschule 後の 4 年が Oberschule です。ところで、さっき分離体系といたしましたのは、その一つが 4 年間の小学校を終えまして後の 4 年間の高等小学校 (Oberschule) にゆく。そうして、それで終って了う行き方です。第 2 の行き方は 4 年間の小学校を終えて、その後中等学校に行き、そこで終りの型。第 3 の場合は小学校 4 年を終えた後で、大学・専門学校までゆける型。この三つは独立したコースなんです。

これが 1920 年までの組織ですが、1920 年に改められて、Gabelungssystem (交錯体系) とい

うものに変ってくる。即ち、小学校4年を終えてから、上の小学校に行ったものが、途中で上級学校に移る事も可能になった。また上級学校そのものが三つ位になって、一つがイギリスの Grammar School に相当する大学進学コースで Realgymnasium とか Oberrealschule 後の二つは大體、昔の日本の商業学校と工業学校の類ですが、1920年以後の改革で、この段階でもお互いに移動が可能になってくるのですから、いまのイギリスの学校制度の改革とよく似たことがドイツでもなされているわけです。

ところで、進学状態ですが、かつては高等小学校コースに進むのが88%、実業学校式のものに入るのが2%、大学・専門学校に行くのが10%といったところでしたが、一昨年の統計によると、小学校上級までのものが81%と少し減り、実業学校が4%、大学・専門学校が15%とそれぞれ一寸ふえています。ともかく、Gabelungssystem になって、一方から他方への転出が非常に考慮されている。それにも拘らず入学試験というものは余り起らない。これには、一番大事な試験が国家試験になるということも多少関係しているかも知れませんが、しかし国家試験を受ける前に大学で一種の資格をとっておくというのが大抵の場合、条件になりうるから、国家試験だけのせいにしてうごかすことはできないでしょう。

7. 3. 入学競争と大学の性格

森口：ドイツでは余り深刻でもない入学競争が日本では大変な問題らしいが、その条件は何か、という点について、数年前にヤスパーズ協会の招きで日本に来ていたクナウスという哲学者が、文芸春秋の10月号に感想を發表していました。大體、われわれの考えに近いと思うのですが、ドイツの場合と比較しているから参考になると思います。でクナウス氏は日本の大学生の多さに大変おどろいた。どうしてこんなに沢山の青年が大学に行きたがるのか不思議に感じていたところ、いろいろ聞いて見ると、日本で

は大学を出たという肩書だけで、社会的待遇が余程ちがうらしい。まあ、日本の入学難とか学生の多さはそれで判ったようなものだが、それにしても、何故大学を出た人と出ない人とに、そんな待遇上の区別があるのか、そここのところが判らないというのですね。ドイツには、それが余りない。学歴如何によらず能力さえあれば、相応の待遇をうけることができるし、例えばハイデッガー博士の息子さんも大学教育など受けていない。小学校の先生をしている。ドイツ人や皆、割合に小さい中から将来の進路について決心するし、日本のように、ただ何となく将来何になるか分らぬが、ゆけるところまで高い教育を受けたいというような暢気な根性で大学に来るものはないというんです。

もちろん、根本的には、学歴が職種だとか待遇に全然、生きて来ない国なんてないでしょう。ドイツも例外ぢやないと思う。専門職とか管理職には高い待遇が伴い勝ちだし、そういう職につくためには、高い知識や能力が当然必要だ。そこで学歴のある人は知識や能力を事実、身につけ易いから、勢いそういう地位にもつくことになるというのが自然に、一般的につくられてくる筋道だと思うのです。ところが日本の場合は、どうかすると、能力という媒介項なしに学歴と待遇が直接結びついて了う。戦前、たとえば大正12年頃のもの調べても、官学出と私学出は、一般会社での採用条件で差別されて、初任給には10円から20円くらいひらきがありますね。

永井：イギリスにも、ドイツと同様、国家試験がありますが、入学競争が余りないという原因となると、そのせいではなく、今、森口さんの云われたことの方に関係があると思うんです。つまり能力は、一つの職業に対応した能力でないといけなないので、電車を運転するには、それにふさわしい能力があり、すぐれた物理学者に必要な能力とは別のものです。別に、学歴は要らないわけですね。イギリスの例で申しますと、商業関係・貿易関係は、ハイスクールを出

た位の人が事実上一流になっているらしい。つまり、仕事の内容と学校の訓練がタイ・アップして、しかもそれぞれの仕事には、かなりよい待遇が用意されている。イギリスでは、それに完全雇用という附録のようないい条件がついていますが、日本の場合、それが無いという事も考えていいんじゃないですか。そうして、この点でも、イギリスとドイツは割合似ているんじゃないでしょうか。

高坂：ヨーロッパに日本を比較して考える場合、もう一つ注意したいことがある。ヨーロッパの人達の間では、近代に入ってから、それ程、職業の上での貴賤という意識はありませんね。ところが社会階層秩序が固定しているかどうかということとは別個に、日本ではひどく仕事の上に貴賤の別をおく。そして、貴い仕事につく資格は大学を出る事に結びついているといった事情がある。だいたい、試験制度というもので、一番最初の大がかりなもの、例の科挙の制度でしょうが、こいつは非常にむつかしいものでもあったし、落ちたらくに帰れないといった話も伝えている位に深刻な側面をもつものであったようです。ところで、日本の試験には、どこかこの支那の科挙の制度に近いようなものが残っていて、それに近い資格を与えるものが大学の卒業だといった結びつきがある。大学は官吏養成の機関だという性格が、はじめからありはしませんか。

ところがヨーロッパの場合を見ると、大学は官吏養成の機関などとして生れたものではなく、主に教会との関係において出来てくる。むしろ法律学のようなものが、最初の課目の一つに属してはいますが、ここでも世俗の法律と共に、教会法といったようなものが大事な役割を演じています。もう一つ大事なものは医科の方の学問です。が、これも必ずしも役人になる必要はないので、大学を出ることによって出てくる資格は、学校で教えるという資格なんです。即ち、ヨーロッパの大学は、だいたい宗教的なものとの関係において出てきて、大学を卒業する

者は官吏になるというよりは、むしろ学者になるという事で、ずっと育って来た。そこで、比較的新しく大学のできた国とは、大学の性格にかなりの違いがあるということが歴史的に考えられる訳です。それと、イギリスやドイツのように大学が古い歴史をもっていると、新しい大学をつくる事が、ちょっと滑稽な気持を与えるのではないかとも思います。

戦前のドイツの大学の数は24だったかと記憶しますが、その中で、現在いわゆる西独に属しているものは16です。いまはどうかというと、ベルリンは新しいフライ・ウニフェルジテートが出来ましたが、ベルリンは両方に分かれていますから、結局、西独に現在属しているのは、戦前と同数の16にすぎません。新しく大学を建てる事によって大学に入る希望を救うなんていう努力がなされているという事は聞かないし、そういう希望が出ているという事も聞かない。日本は沢山、新しい大学をつくるという点では、アメリカに似ている。

永井：たしかに、いまの日本の制度は、アメリカ流の制度なんです。アメリカ流の制度はアメリカでは、うまくいっているらしい。では、アメリカの制度は、アメリカでどういう風に機能しているか、ということですが、統計的な資料は、Warner たちの Who Shall be Educated? にも出ています。ともかく、アメリカの場合も、colonial period はやはり dual system、それで high school のはじめは、Boston Latin School なんです、ここでは名のとおり古典をやったわけです。そのうち Public education という形で high school がのびてきた。大学も私立大学に拮抗する形で state university がでて来た。現在アメリカの諸州では、high school さえ卒業していれば、state university には無条件に入れるところが多い。それにも拘らず、たやすく入れるから入学競争がないんだという説明はうまくない。というのはアメリカにも、東大に比敵する Harvard があるわけで、そこには入学競争がありそうですが

割にない。ニューヨークには相当むづかしい入学試験をもっている大学の試験をまとめて代りに試験をやる機関がありますが、ここでも一番競争の烈しいので3倍位。

ではどうしてかという、職業の社会的地位の問題やさっき出ていた貴賤観念の問題、これが大分、日本とは違っている。たとえばエンジニアや弁護士というものの社会的地位は高いが、官吏の地位は余り高くない。ですから官吏になるために大学に行くといったことは余りない。このように、職業についての観念が伝統的に違うという事が一つありますね。

それに他面では、high school を出て実業社会に出ていくものは、だんだん待遇がよくなっている。これには、いろいろな調査があるわけですが、大学出と高校出が差が少なくなって来ている。一例をあげると、ニューヨーク州の小学校の先生の給料は、コロンビア大学の先生よりもよるしい。ニューヨーク州の郵便配達の給料もコロンビア大学の先生の給料よりも宜しい。それがいいかどうかは問題ですが、実際そこまで来てしまっている。だから、郵便配達になるために苦心して New York State University というものを出る必要はないわけです。

もう一つ、アメリカの場合は、中央と地方との問題で日本と違います。中央尊重という事が左程ありません。localism が今でも強いですから、地方で会社をつくる場合には、地方出身者が優先する。中央から来たものは就職しにくい。これがまた大変大切なところです。現象的なものを更に続けると学閥みたいなものが、なくはないにしても、弱い。こういう事も、競争率を弱める作用をしていると思う。日本の場合は、こういう社会的条件が全部ないところで、ほぼアメリカと同じ制度をつくった。しかし、アメリカでは必ずしもうまくいってないということはないわけです。

高坂：アメリカとの比較ですが、この間ドイツ人がアメリカについて書いた論文に面白い寓話を引用してみました。それはバルカンあたり

の王様がアメリカに来て、いろいろな話をしてきた時の話なんです、まずイギリス人をつかまえて、あなたはどこの国の Subject か、ときいたら、「私はイギリスの Subject (臣下)だ」と云った。ついで今度はアメリカ人に、あなたはどこの Subject かときいたら、「私はアメリカの Subject ではなく、アメリカの方が私に属しているんだ」と云ったというんですね。気持の上に大きな差異があるのです。そこでこの話と関係するんですが、アメリカでも殊にパイオニアという運動において、だんだんアメリカが広がっている時に、最初に建っているのは教会ですね。独立した学校というのは、なかなかできません。教会が日曜学校的な役目を演じています。そのうちに独立的な学校が徐々に出来てゆく。それが現在にまでなってくると、アメリカの地位が全体的に高まりもするしききも云ったように、「アメリカが自分に属しているんだ」といった意識から、citizenship という事が大事になってきますね。官吏になるといった事はこの次ぎで、citizenship を養うにふさわしい、それに必要な教育を授けるのが general education で、これを立派にせねばならないという意識です。このことに非常な熱意を示していることは、地方で一番立派な建物が小学校だということにもあらわれている。それに対してはそれぞれの地方の人達がみんな、全力をあげて、協力し合っている。結局、アメリカ人の頭にある学校の性格というものは、決して日本のように上にゆく道すじとしての学校じゃない。

永井：今の general education に関してですが、日本では戦後、アメリカ的な制度を取入れて general education を重んじるということになり、その結果、法文系の大学がふえたわけです。これはアメリカに比較しても多い。アメリカは general education が好きだからといって、それで法文系大学をつくったかというところではない。general education は市民的教養だと思いますね。ところで実際は、市民的

教養としての **general education** を大事に考えるとともに、学校教育は **Vocational education** だという考え方も強いです。だいたい **State University** というものがいかにして出来たかという、これはモリル・アクトという法律によってできたのですが、州立大学の別名が **land grant college** であることがそれを示すように、まず土地を与えて、これを基礎にした費用で各州学校をつくってゆくという型なんです。だから学校は何をやったかという、土地開発のための **agriculture** とそれに **technical education** の二つ、それに国家に対する土地の代償としての軍事教練というわけですね。

このように、**State University** のはじめは農学部と工学部だった。**general education** も重んじるが、このような社会的需要との結びつきを重んじる面も非常に重要です。現在でも、学校を拡張する場合には、社会の職域からの需要とどういう関係にあるかということが関心の根本にあります。たとえば現在ですと、**Speech** 学部というのがあります。これはジャーナリズムが発達して来ると、ラジオ・テレビその他で **Speech** を上手にやらなければならないというのでできた。その他、言葉の上での **defect** を人道的立場から救うといった意味合いもあった。ともかく、アメリカでは、社会の職業的需要がある場合、その供給源として大学を考える。そこで、国家全体としてはレッセ・フェールな訳なのに、それで **general education** 過剰にはならないし、法文系過剰にもならない。アメリカの場合は、このような歴史的理由があるんだと思います。

高坂： たしかに、どこの国でも今の大学の性格には歴史的由来というものが作用している。ドイツでもイギリスでも古くから宗教教育といったものがあったり、研究を主とする考え方が強くて、象芽の塔という言葉——ドイツのもフランスから出たんですが——で大学が **Symbolize** されるという事情があった。ところがアメリカの場合は、**Social service** の大学というところ

に狙いをおいているでしょう。それには、それぞれ長所と短所がありましようが、日本の場合は大学の性格がどっちつかずで、この点、変なものだと思います。

森口： いま、大学の性格論が大分出て、日本のは変なものだということになってきたようですが、ではどういう風に変かということ、試験制度をふくめて、もう少しはっきりしてはみてはどうでしょう。

7. 4. 大学の機能と試験制度における日本の特殊性

永井： それはつまり、大学の機能が余りはっきりしていないということですね。大学は、もともと幾つかの機能をもっていると思う。たとえば今の時代で非常に明瞭なのは **technical expert** をつくる事、研究者をつくる事で、莫然とした学歴をもつための大学など余り必要ではないと考えられる。事実、他の国の場合、割にそういったものはない。ところが後進国の場合は、始めは **technical expert** ということと始まるが、それがだんだん箔の方に値うちが出て来て、日本はそこで困って来ているのじゃないですか。

森口： 大学の機能がぼやけたままで、莫然とした学歴尊重というものは強い。

池田： いまの日本の学歴尊重だが、これは戦後、特に強くなって、入学競争率もそのために激しくなっているという側面もないですか。たとえば、現在、公務員の給与基準では、学歴年数を重く見るでしょう。あれなんかむしろ戦後にきつくなっているんじゃないですか。

森口： そういう面もあるかも知れません。しかし、初任給や昇給の場合、学歴がどれほどものを云うか、という事では、戦前の方が強かったという資料の方が多いのじゃないでしょうか。ここにはもってきていませんが、一例をあげると、大正12年の場合と昭和29年との比較対照があります。大正の分は東京経済社が570社ばかりの当時の企業体における技術者を中心に調べ

たもので、最近の分は、労働省が個人別賃金調査で調べたものですが、両者を比較すると、大正年代の専門学校出の昇給率は大学出のそれとの間にかなりの差があるが、今ではその差がずっとちぢまっていることになっています。

相良：私は官吏以外のことは知らないが、官吏は、やはり昔の学歴別待遇差のさが一寸ひとかったのぢやないですか。

池田：昔もひとかったかも知れないが、どこを出てもある程度まで行けるとい希望はあったので、今では、小学校や中学校だけでは駄目だという気分は強いぢやないかと思えますね。たとえば、かつての牧野富太郎さんのような人は、今の学校制度では、これからはもう出ないぢやないかと思う。昔は、入学試験競争というものはあっても、そんなに問題視されなかった。結局、入りたいと思うものの数と容れもの大きさはアンバランスであるのが普通の状態である。とすれば、時代が進むほど、上の学校へ行きたいというが出てくるのですから、それに応じて上の学校をふやすという問題になる。しかし、ともかく入学者選抜というものをさける事はできない。いったい、競争試験が何故そう問題になるのか、それが一つの問題だと思ふ。

森口：しかし、アンバランスが普通の状態だといわれましたが、それなら、世界中どこにでも同じようなひどいアンバランスと入学競争があつてよきそうだけれども、日本のは一寸、程度がちがうぢやないですか。だからまた問題にもなると思ふのです。たとえば私の調べたものによると、日本の大学という容れものは決して小さくない。人口比にすれば、アメリカとフィリピンに次いで世界第三位です。英・仏・独・伊・カナダ・スイス・スウェーデン・ベルギー・オランダ・デンマーク等、一流文明諸国といわれる国々の大学収容力は日本より少く、大部分は、人口比で日本の2分の1とか3分の1しかありません。また一人当り国民所得といった国民の富の程度と考えあわせれば、もっと日本

の容れもの大きさは目立ったものになると思います。アメリカは人口比での大学生の数は日本の2倍半ですが、国民所得は10倍です。このように、国民一人一人が、大学生をかかえていることから来る負担の程度といったもので考えれば、フィリピン一國が例外で、他の文明諸国とは比較にならないでしょう。英国などは日本の20分の1程度、フランスや西独が6分の1程度、アメリカで4分の1程度といった計算も成り立ちます。ですから、これだけの貧乏国で農業率の高い国柄で、しかも大学の収容力が非常に多いのに、しかも、他の国には見られないほどの志願者がおしよせて器からはみ出るのは特異現象として、注目していいぢやないのですか。

倉石：向学心というときこえはいいが、結局は学校教育に対する過信というか、迷信というようなものがあるのではないですか。

高坂：やはり、そこのところになってくると歴史的な事情から見てゆかねばならないでしょう。何故かという、さいしよ日本に新しい教育制度ができた一番の狙いは、ヨーロッパの新しい文化の摂取という事ですね。その頃には、官吏をつくるにしても、実業家や技師をつくるにしても、そういう所で養成しなければできない。その頃には、そういう要求が強かった。このかぎりでは大学の機能は割にはっきりしていた。ところが需要を充すだけの設備も沢山はないのですから、そこにさえ入れれば将来は約束されますね。そういう気持がずうつとある。実状がだんだん変つてきても、やはり大学を出れば、ある程度の高い能力および資格をもっているはずだという気分がある。だから自分の家・屋敷を売つても子供を上为学校に入れようといったことがおこつて来た。それは明治以来の気持の続きです。悲観的にも考えられるが、向学心という言葉を使うのなら、そういうものを求めている国民だとも云える。そして、明治以来、社会の階層は割に固定していたかも知れないが、それを破つてゆくような何かが、やはり

そういうものを通じて出てきている。

だから日本の近代化の速度は、アジアの中では早かった。いまの進歩的な歴史家達は、日本の近代化が何故おくれたか、ばかり問題にするが、世界の全体からいうと、何故はやかったかという問題におきかえた方が正しい位の **rare case** です。この近代化を非常に進めた条件はというと、大学に学びそこでヨーロッパ文化を摂取したものが社会に出て、ある種の指導的な地位を占めてきたということが関連してくる。だから悪かった面もあるけれども、良かった点もある。また、将来の行き方によって一層よくなる。ただし現状は余りにもひどい。

相良：いま高坂さんのいわれた日本の大学の成立事情についてですが、私はせんだって東南アジアに行って、しみじみ感じたのは、それが日本だけの特殊な事情ぢやないということです。東南アジアの新興国家は、かつて日本が歩んで来たと同じようなことをやっている。日本のかつての大学が官吏の養成機関であったのと同様、東南アジアでは、大学がすべてそうです。非常に人材が欠乏しているから一刻も早く自国民で政治・経済がやれるよう養成したいわけです。インドネシアでも、Dutchの統治下では僅か200人しかいなかった大学生が今では38,000人になっており、大学に非常な力を入れている。その結果、日本ほどではないが、入学試験競争も相当あるようです。フィリピンも同様にU・Pといわれる大学には15,000人の大学生がいます。そうして、その大学を出たら将来の立派な地位が必ず約束される。タイのチュラロンコン大学も、機能はというと官吏養成と教員養成で、それ以外の何ものでもない。そのかわり、そこを出れば、将来は絶対約束される。ここでは入学に大変な入学試験がありますが、日本の昔に同じですね。短い期間に、新興国家が追いつくためには、そういう方法をとらざるを得ないのですね。

永井：しかし、日本はもうここまで進んで来たのだから、この辺で一寸工夫があつていいと思

いますね。

森口：それは、最初の話にもどりますが、永井さんの言葉をかりれば、社会が追いつかねばならないということなのでしょう。高坂先生のお話にあったように、日本が近代化をいそいだ時代の心理的隨性とてもいうべきものが、いまでも入学競争をおおる条件になっている。だから社会意識が制度に追いつけないでいる。

池田：ぼくの独断論かも知れないが、入学試験をもっとむづかしくして、容易に大学には入れないようにする。それも解決方法の一つぢやないか。そうすれば落ちてあきらめる、やさしい問題を出すと、ひとはなかなかあきらめない。むづかしければ、俺はできなかつたんだと却って安定感が得られるんじゃないか。

高坂：ある意味では賛成だ。

池田：明治のはじめ、伊藤博文が「教育議」というものを書いています。原案は井上毅ですが、その中に阿呆な奴が上の学校にゆくとつまらん政論をたたかわせるんで困る。もっと頭のいい奴をえらんで法学をやらせなくちやならんという意味のことをいっている。明治初年の漢学がどうの国学がどうのといっていた頃にも、頭の悪い官学出の連中が阿呆な政論をたたかわせる。それをもっと落ち着いたものにするためにはもっと頭のいい奴だけを大学に入れるべきだ。そこでもっと入学の選を厳にせよというのだがこの精神は面白い。また入学競争も明治では余り問題にもならなかった。むしろタフな神経ですごしてきた。入学競争を問題にしはじめるのは大正13年頃からで、その頃から入学試験の在り方を変えなくてはならんということになり、標準テストの如きものが加味されたり、昭和2年には、はっきり入試という言葉が抹殺して考査という言葉に変えてみたり、あるいは入学前の学業成績や選抜試験の成績、口頭試問、身体検査等を総合的に勘案しようという考え方が出てくる。今日にいたるまで、いろいろな方法が考えられてきたが、ともかく入学試験がやさしくなつたから却って猫も杓子もおしかけるとい

う面があるのではないか。

倉石：いや、京大教授はおそらく、今の入学試験に通らないだろうな。

永井：タフな神経ということを池田先生はいうけれども、明治の人でもいま生きてれば大学に来る。たとえば、京大の先生は明治の頃なら、どこの大学を出てねばならないということはないでしょう。大学がなかったんだから、学問が好きで、できる人がなった。これは政治家であろうと実業家であろうと同じことです。ところが、大正・昭和に入ってから学校を出た人が偉くなるようになって来ている。はじめの頃の方が確かに自由だったと思う。学校がないんですから。しかし大正の末期にはそうではない。さらに学歴別が固定化してくる。だから大正10年前後から入試が問題になってくるのは偶然ではないと思う。

倉石：大正の末に入学試験の競争率が急にはげしくなったのは、その時は新制大学をつくった時と同じように、高等専門学校をふやした。それが却ってよび水になっているようなものですね。

高坂：もっとも、あれは第一次世界大戦後の好景気の時ですね。ところで、さっき池田君から話された試験をむずかしくするという事に賛成したのは条件付きなんです。いまの日本のは入学者の定員でおさえていますね。それよりも、ある程度の学力をもった者でなければ入れないんだという標準学力で切ってみる。それから後の人間の整理はどうするかという問題は、またその上で考える。ドイツのやり方はこれで、点で切っています。入った上で淘汰するやり方ですね。

相良：フランスも同じやり方をとっていますね。フランスは試験が非常に好きだが、入学試験というものをやるのは特殊な学校だけで、一般にはありません。一般には、むしろ学校に入ってから試験が非常にきびしい。殊に大学に入る前に大学入学の資格試験—いわゆる *examen du baccalaureat*—を受けなければいけな

い。大学に進もうと思うものは、無論それを受けますが、女子も嫁入りの資格として受ける。これは非常にむづかしくて一度で通るのは非常な秀才。大抵は2年あるいは3年かかる。この場合、この資格をとったものを *bachelier* というんですが、それで何処の大学でも入学できるが、その代り、中に入れば大変な試験があって淘汰される。それでフランス人はこの制度をよく自慢するんです。ラテン系の国は、この方式をやるのが多いですね。イタリア、ベルギーなどもバカロリア的な試験制度があります。

官吏ならば、係長から課長へ、課長から部長へと試験がある。どこでも中に入ってから試験は大変だが、入学試験は余り問題にされない。特殊な学校、たとえば高等師範学校、教員養成学校、官吏養成学校では10に1人位の競争率で入学試験が行われていますが、17の大学は *bachelier* でありさえすれば、どこでも入れる。フランス人は、それが入学試験の弊害をなくしていると自慢するんですね。日本も入学試験をやめて、こういう風にしたらどうかというんですよ。

倉石：結局、適性検査ということですね。

永井：フランスの場合、17のどこの大学を出ても、余り違わないですか。

相良：余り違わない。それに1つの大学のどれかに集中するというのも余りない。それは、一つの大学がそれぞれ皆、特殊性をもっている。たとえば文学、とくに比較文学ならリオン神学ならストラスブルグ、理学系ならパリ大学という風に、それぞれに独自の伝統なり特殊性をもっている訳です。日本でも今の72の国立大学が特殊性をみせなかつたら救われなと思いますね。

高坂：今の相良さんの試験制度の話ですが、ソ連は別として、ヨーロッパ大陸全体が、資格試験的なゆき方ですね。ドイツの場合もそうで、やはりバカロリアと同じものがあり、それに通ったものは16のどこの大学でも行ける。ドイツでは設備の関係があって理科系その他の実験設

入試の研究：シムボジアム

備で制限されるところだけ、止むを得ず試験をしています。それでも落ちるもののパーセンテージは10~20%にすぎません。ドイツでも、大事なものはむしろ、学校内部での試験なんで、これにはずい分議論がかわされる。しかし入学試験は余り問題にされない。日本の場合、入学試験に集中するのところが、教育と試験がびったりくっついている、というか、教育のための試験なんですね。ところが日本では教育と試験が切りはなされている。これが何より考えねばならぬ点だと思うのですよ。

森口：確かに、試験のための教育といった片輪な面が強いですね。

永井：いま高坂先生のおっしゃった点は、英・米ともに同じで、やはり教育と試験がばらばらぢやないという感じですね。

森口：他にも、こまかに比較すれば、いろいろな問題があると思いますが、欧米各国と日本の相違を考える場合、一番重要ないくつかの点は、大体、お話し頂いたように思いますので、これで終ることに致します。

〔附記〕 この座談会記録は、1957年11月25日に、約2時間にわたり、行われたものの要旨である。紙数の関係もあって、テープにおさめたものを、森口が約3分の2の分量に圧縮整理した。